

友だちといっしょに場に適した活動をする子

川 本 和 正

はじめに

E男は、公立小学校心身障害児学級から本校中学部入学以来3年を過ぎようとしており、自分なりに見通しを持ちながら学校生活を送っている。個性豊かな学級集団の中で同級生と快活に交わり、教師、先輩後輩とも積極的に関わろうとしている。しかし、熟考して対話をしたり行動したりすることはまだできず、心に残らない会話の部分が多い。そして、新しい場面では気後れからしりごみしてしまい、積極性が見られないことがある。このようなE男が、様々な集団の中での失敗や自分の責任を果たした成就感などの経験を重ねる中で、少しずつ物事に見通しを持ち、落ち着いて（集中して）取り組む態度を身につけつつある姿を述べてみたい。

1 プロフィール

(1) 生 育 歴

- ・昭和55年3月20日生 14歳10か月 中学部3年 男子
- ・公立小学校（心身障害児学級）より平成4年度本校中学部に入学、現在に至る。
- ・両親、兄、姉、本人、弟の6人家族

(2) 諸検査による実態

- ・知能検査 IQ52(言語性50、動作性63) WISC-R
- ・S-M社会生活能力検査 SA 9:3

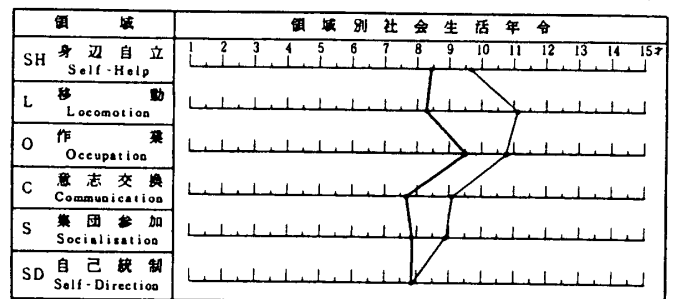
右の図に示すように移動、作業の領域に比べ意志交換、集団参加、自己統制の領域が低い。

- ・コミュニケーションサンプル

自分の経験や受けた印象、家庭でのできごとなどよく説明し情報提供をしようとする。また、教師や生徒に常時話しかける。

(3) 行動・コミュニケーションの特性

- ・相手の話、目に映るものに即時に反応し、考えないで言葉を口にする傾向がある。
- ・指示、説明を断片的にしか聞かないで、勝手な判断で行動することが多い。
- ・文章は、事実のみの羅列が多かったが、



— 平成5年5月 — 平成6年10月

S-M社会生活能力検査

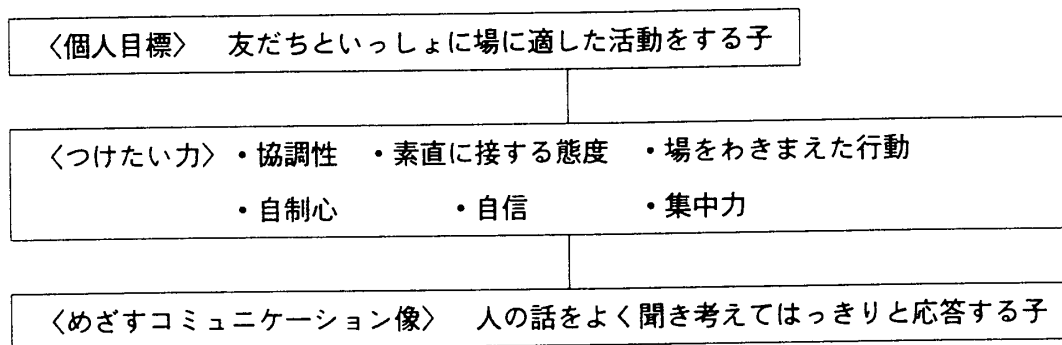
1学期後半より自分の感情を表現する言葉が多く見られだした。

- ・返事、挨拶、意見発表は積極的にできるが、語尾をはっきりせずしりすぼみのきらいがある。また、時々自信のなさからくる気後れが見られ、教師の励ましを受ける場面も多い。

2 取り組みの構想

(1) 指導仮説

以上の実態をもとに、E男が友だちと素直に関わり、よりよい人間関係を築いていけるように、次のような仮説を設定した。



クラス内外の友人たち誰とでも、思いやりを持って関わろうとするE男の意欲を大切にしながら、様々な集団や、校外の人ともけじめある応対ができるように、まず、自分が話したい衝動に駆られても我慢して、相手の話を最後までよく聞く自制心を獲得させる。そしてよく考えてから自分の意見を発表させる。さらに、中学生らしい言動やマナーを身につけ素直に友人、先輩、後輩と接する態度を身につけさせていく。このことは、友だちとの関係をよりよいものにし、自信を持ってより積極的に活動するE男の姿へつながると考えた。

(2) 指導方針

- ① 友だちや教師の発言中に意見をさしはさむことが多いので、黙って最後まで聞くけじめを身につけさせる。
- ② 挙手での意見発表をとりあげるようにして、徐々に話し合いのルールを身につけさせる。
- ③ 指示をよく聞かないで作業にとりかかり失敗した時をとらえ、最後まで聞くことの大切さに気づかせる。
- ④ 中3としての責任や立場を意識させ、最上級生としての言動やマナーを身につけさせる。

3 指導の実際

(1) 生活単元学習

生活単元学習においては、様々な個性の生徒集団の中で活動する。責任を持たされた場面で、どうしても自分がやらなければならない状況を意図的に設定し、失敗を繰り返しながらも少しずつ見通しを持ち、集中力・自制心を獲得し、自分の責任を果たし、自信を獲得する場面を期待した。

次に「キャンプ」「修学旅行」「大山宿泊学習」の単位におけるE男の取り組みの様子について取り上げてみたい。

① 「キャンプ」での取り組みの様子

題 材	手 だ て	取 り 組 み の 様 子
話し合い活動	意見発表は挙手をしてするように助言した。	私語、つぶやきが多い。「10秒間静かにしましょう」と声かけをすると、静かに考えて意見発表ができた。
ツナサラダ作り	作り方の手順を示し、質問があるまで一切声かけをしなかった。	家庭で調理をよくやっているので、要領が良く速い。しかし、雑なところがある。説明を1回すれば、指導者に聞かなくても調理をすることができた。第1回目の学習の時、できあがったツナサラダをこぼして1/3をだいなしにしてしまったが、以後注意深く取り扱うようになった。
テントはり	口出しや手出しは極力控え、困った時、分からない時質問すれば、援助することを事前に約束した。	第1回目の学習では、指示や説明をしっかりと聞きとっていないので、張りかたの手順が分からなかった。いろいろ試してみるが、すぐにあきらめようとした。せっぱつまって、メインロープの張り方を質問し、援助をうけ、何とか設定時間内に張ることができた。試行錯誤の連続であった。
キャンプ当日	できるだけ生徒自身の力で挑戦させ、援助は控えた。	ツナサラダは余裕をもって作り上げた。テント張りには苦労したが、約40分かかって自分たちの力で張ることができた。
運 搬	自分達の持ち物は自分達で運搬し最後までやりとげさせた。	キャンプ最終日、自分からテントを背負って帰ると言い出した。自分の言葉に責任をもたせるため実行させた。10kg近い重さのテントを背負い「重たい」「苦しい」とつぶやきながら約3kmを歩いた。

実践の結果

話し合い活動では、E男のルール無視の割り込み発言が多かった。考えて発言させるため、耳元での「良く考えましょう」等の声かけは実に効果的であった。各場面の失敗経験は次の活動へのよきステップとなり、キャンプを成功させた原動力になった。又、自分で言い出したテント運びの提案は、自分の言葉には責任を持たなければならないことを、身体を通して学習する契機となった。

② 「修学旅行」での取り組みの様子

題 材	手 だ て	取 り 組 み の 様 子
しおり作り	自主学習とし、資料をもとにまとめさせた。分からないことのみ質問することとし教師の援助は控えた。	E男は、「原爆の子の像」「千羽鶴」「原爆死没者慰霊碑」の3か所を調べた。難しい言葉「支援」「祈念」等は、別の簡単な言葉に置き換えて説明すると理解できた。この学習は、一対一対応での学習なので自分のペースで意欲的に取り組むことができた。
修学旅行当日	極端に逸脱した行動をとった時はその場で注意し、自分の行動を振り返らせるようにした。	原則として、1列で歩くことを約束したが、目に映る物すべてがめずらしく、列の前へ出ていく傾向がみられた。注意すれば決められた位置に退く傾向は、最終日まで続いた。
M社での挨拶	場に応じた行動を期待し援助は控えた。	修学旅行団の代表として、事前に学習した通り礼儀正しく挨拶をすることができた。

実践の結果

しおり作りでは、調べる項目を自分の希望で決めた。個別学習なので他の生徒に気をとられることもなく、静かに学習できた。修学旅行当日、都会の雑踏の中でも、危険なことなく行動することができた。修学旅行後、新聞、TVで報道される広島ニュースを家で見たことを報告した。修学旅行の学習が事後もE男の生活の中に生きていると感じた。

③ 「大山宿泊学習」での取り組み

題 材	手 だ て	取 り 組 み の 様 子
話し合い活動	一人ひとりの思いを十分ひきだせるように、小グループ編成とした。	自分の安易な思いつきでの発言が多々みられた。自分の意見にこだわらず、他の生徒の意見に簡単に同調する場面もみられた。熟考してからの発言がないので、「今は聞く時」「よく考えて」等の文字カードを提示すると、しばし考えてから発言するようになった。
現地での行動（自由行動）	班員と一緒に行動できるように、遅れた生徒には励ましの声かけをした。	大山寺周辺六か所を巡る行程であった。ほどよい緊張感は団結意識を呼び起こし、E男は遅れがちな生徒を気遣いながら歩いた。行程半ばで、余裕も生まれると「山がきれいですねー」「ここは去年も来ました」などその場に即したやりとりを楽しむことができた。
和傘伝承館	学校外の人とのコミュニケーションをする機会を設定した。	何か質問はありませんかの問いかけに、真っ先にE男が挙手をした。「僕たちが使っている傘はいくらしますか」と質問することができた。又、お別れの挨拶では「この傘は大切にに使わせていただきます」と大きく、はっきりとした声で礼儀正しく挨拶ができた。

実践の結果

話し合い活動では、自分の意見に十分な根拠がないため、簡単に他の生徒の意見に同調してしまうことがよくあった。しかし、実際の行動を伴った場面では、E男は快活に場に合った話をした。大山寺での自然の中で、歩きながら教師や友人とお互に励まし合ったり、去年の思い出を話し合ったりしてその場に合った話題でコミュニケーションができた。

和傘伝承館では、質問、お礼の挨拶ともみごとであった。はっきりとした声で、礼儀正しく質問、挨拶ができたことは本人の自信につながった。購入した傘を大事に抱えている表情には、ことをなしとげた満足感がみられた。

(2) 課題学習

本クラスはA, B, Cの3グループで学習している。ここではE男の属するAグループ（軽中度の生徒の集まり）につ



和傘伝承館での挨拶

いて記してみたい。このグループは、4月当初、騒がしく落ち着いて問題に向かう姿勢がたりなかった。そこで全員が静かに学習するため、1学期中頃より個別学習にきりかえ、各生徒の進度に応じたプリント学習とした。自分のペースにより近い学習となったため、グループ全体に少しずつ落ち着きがみられだし、学習も進み出した。E男は、集中できない時は、自分から机の位置を変えて気分の切り替えを図って学習した。

成果は小さなものであるが、次のようなものがあげられる。

- ・あと何分がほぼ正しく言えるようになった。
- ・掛け算がより正確にできるようになった。
- ・割り算の計算が筆算を使ってできるようになった。

特に、2学期よりワープロ学習を取り入れたところ、最も興味を示したのはE男であった。ワープロに向かい入力するには集中力が必要である。周りが騒がしくても、課題学習でのプリント学習が早く終わった時や放課後、熱心に自分の日記を入力する姿がみられだした。今後は、学校文集原稿作りに発展させたいと考えている。



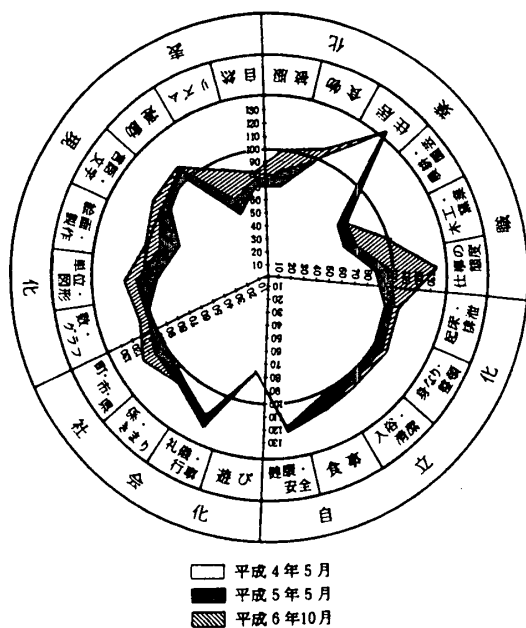
ワープロ学習

4 考察と今後の課題

各場面の実践により、少しずつ自信を獲得し、その場に適した活動をするE男の姿勢が伺われる。授業中「今は聞く時」「落ち着いて」「良く考えましょう」などの文字カードをこっそり、自分のポケットからだして見ている。日記にもその日の反省や、賞賛され、認められたうれしさを記している。

これは、自分の評価をもとめ、はげましや注意を糧に向上しようとする姿であり、自己客観視の芽生えととらえることができると考えられる。

右図に示す段階別教育内容表からは、職業化、表



段階別教育内容表N段階到達度評価 (E男)

現化の領域の伸びが大きい。職業化の伸びは、本来本児の持つ活発な行動がより作用したものと考えられる。表現化の伸びは著しいものではないがコミュニケーションの基本的な力（言語、文字等）がすこしずつ蓄積されていっているものととらえたい。今後も、本人の本来持つ明るさ、人なつこさを大切にしながら、聞く時は最後まで聞く、話す時はしっかり自分の考えをまとめてから話すようにさせたい。そのために文字カードや、「君はもっと集中できるはずです」など、自分で自分の気持ちの切り替えのできるきっかけをつくる声かけを工夫し、自己コントロールする力をさらに獲得させ、落ち着いて活動する姿をめざして指導を継続していきたい。